

タイトル：宣教に伴う言語学（2008年度第1回研究会）

日時：平成20年9月16日（火曜日）午後2時より午後5時

場所：本郷サテライト7F会議室

報告：

1) 岡美穂子(東京大学資料編纂所) ツツ・ロドリゲスの日本プロクラドール覚書— 日本プロクラドールと徳川幕府禁教後のイエズス会貿易—

アジュダ文庫(リスボン)所蔵の *Jesuitas na Asia* 写本群中のプロクラドール覚書き(1629)が、恐らく通事ロドリゲスの編である事の推定、及びその内容の持つ意義に就て。当該写本中の諸文言の特徴と通事ロドリゲスの他文書(特に自筆文書)との整合性等に就ての討論が行なわれた。(尚、*Jesuitas na Asia* は、全て18世紀に作成された写本であって、原本ではない)。

2) 岸本恵実(AA研共同研究員、国際基督教大学) キリシタン版『羅葡日辞書』正誤表に関する報告

同書に附された正誤表に見える錯誤から、『羅葡日辞書』の原形態を推測しようとする試み。当時の「正誤表」の位置付け一般、キリシタン文献に於ける「正誤表」の意味、「葡羅辞書」(1607、自筆写本、リスボン科学アカデミー)編者の M. Barreto の関与などに就て、討論が行なわれた。

3) 白井純(AA研共同研究員、信州大学) キリシタン版の文字遣

キリシタン版の後期版国字本の平仮名用字法に就て、変体仮名活字・連綿活字の持つ語境界表示機能、語尾専用用法などを分析したもの。変体仮名を活字化する事の意義、「語境界表示」よりも「語境界ではない事を表示する機能」も考慮する余地がある事などの討論が行なわれた。

他に、来年度以降の活動に就て、研究打ち合わせを行なった。